

音と身体

伊勢史郎

Body += Sound Shiro ISE

自転車

自転車に乗れるようになった幼き頃、今までとは違うスピードの世界に夢中になった。世の中の風景がどんどん後ろへ過ぎ去っていくという空間の感覚が新鮮で、自転車という道具が単なる移動の手段ではなく、新しい空間を提示してくれる装置だということを感じ取った。子供の足では限られた狭い範囲でしか体験できないそれまでの静的な世界から、自転車という道具を足の中に挟むことによってより早くより広い範囲の空間を把握することができる動的な世界への変化は、私自身をとて大きく成長した気分させた。自転車という新しい足を身体に取り付けることによって、それまで家の外のよそよそしい世界が親しむべく自分の庭へと変化したのだった。自転車に乗るという技能を獲得したことにより、それまでの人生（といっても4,5年くらいだが）で得た空間の感覚は全く新しいものに置き換えられた。

新しい空間を知るための道具が存在する。新しい空間を知ることが喜びであり、身体は道具を使う技能を獲得しようとする。道具を身体化しようとする能動性は、したがって空間を身体化しようとする能動性に等しい。その能動性をいつも発揮してもらえる状態がヒトにとって幸せであることを意味する。

道具は身体の延長であり、オプションだと言って良い。足という標準装備に自転車というオプションを取り付けることにより、通常では味わえない空間を体験できる。技能とは標準装備である身体とオプションとしての道具を一体化するための能力である。

金槌 手という標準装備に金槌というオプションを取り付けることにより、木に釘を打ち込むことが簡単にできるようになる。しかし、金槌は単に釘を打ち込むことを簡単にするためだけの道具ではない。自転車が単に移動を簡単にするためだけの道具ではないのと同じように。役に立つ道具はヒトにとって価値があるが、ヒトが過剰に価値を感じる部分は、実用的に何かの役に立つこととは別である。自転車が単なる移動装置という道具であることを越えて過剰な価値を有するのは、新しい空間を提示してくれる装置だからである。これは金槌にも言える。金槌が価値を持つのは、単に釘を素手で打ち込むことの困難さを解決することに留まらない。金槌を使って釘を打ち込むことにより、木の内部の状態を知ることができる。さらに熟練すれば、釘を打つことによって木の構造物がどの程度の強さで他の木と組み合わさっているのかを知ることができる。釘を打つことによって得られる視覚、聴覚、手の振動覚の情報が統合されて、木の内部の空間へ意識の焦点を移すことが可能になる。身体の外側への空間的な広がりを感じることによってヒトは快感を得る。それが高い意識を保つために重要な機能を果たしている。

金槌を用いることによって自分の身体から木の内部へ焦点を移動させることができると述べたが、このような認知機能を暗黙知理論の用語では潜入と呼ぶ。金槌という道具を使う技能が高くなると、釘、木材、木材の構造物へと潜入する深さも増すことになる。自転車は単なる移動の手段ではなく、金槌は単なる釘を打ち込む手段ではなく、それらは近所の空間や木の内部の空間へ潜入するための道具である。そして潜入によって我々は外部世界を自分の身体のように感じることができる技能をもつ。技能を高めることにより、空間をより広く、より詳細に知ることが可能となる。

聴覚 我々の身体は効率よく空間を知るための標準装備として聴覚をもっている。音は秒速 340m という速度で我々をとりまく空間の情報を身体に伝達する。聴覚は自分の身体を包み込む周囲の状況を意識とは別の次元で常に把握しようとしている。視覚も当然空間を知るための道具と言って良いが、視覚は主に攻撃のためのセンサーであり、聴覚は主に防御のためのセンサーである。ここでいう攻撃と防御は食うか食われるかということに等しい。視覚や聴覚をもつ多くの動物にとって、獲物に焦点をあてて攻撃して食料にすることが視覚の主な目的であり、反対に自分を攻撃する敵が近くにいることを察知することが聴覚の主な目的である。獲物に焦点をあて（視覚）、つかみ（触覚）、食べられるのかどうかを調べ（嗅覚）、無害であることを確信する（味覚）という攻撃的な動作に対して、周囲の状況を知るといった防衛本能を担う聴覚は他の 4 つの感覚とは位置づけが異なる。したがって、他の 4 つの感覚が快感に関

係し、生や喜びに関係するのに対して、聴覚は不快感に関係し、死や恐怖に関係している。

音 音は目に見えないが、波動というエネルギーをもつ実体である。アインシュタインが相対性理論により物質とエネルギーが同等であることを示したが、これはエネルギーが物質と同等に実体であることを意味する。音のエネルギーは微小であるが、物理的な実体として考えてよい。鼓膜の表面に達する音のエネルギーをヒトは感知することによって、空間で何が起きているのかを我々は知る。つまり、身体をとりまく音という実体を身に纏うことにより我々は空間を身体化している。身体化された空間の内部に異物があることを聴覚が察知して危険を感じれば、我々は他の感覚、特に視覚を用いてそれが本当に危険かどうかを確認する。虫がブーンと音を立てて耳元を通れば我々は本能的に意識が呼び覚まされ、それが蚊なのか、かなぶんなのか、蜂なのか、蜂であれば大きなスズメバチか、小さなミツバチか、などを同定しようとする。蚊が耳元を瞬間的に飛ぶだけで、意識が呼び覚まされて眠れなくなる経験があるのである。エネルギーとして考えるとこれは非常に微小であるが、それでも自分の身体の安全性、大げさに言えば死に関係する出来事であり、その本能的な危険信号が意識を覚醒するためである。

室内空間 我々が日常的に過ごす空間は聴覚の機能によって身体化されている。ある室内空間が落ち着くか、落ち着かないかは無意識領域では音が支配していると言って良い。静寂が続けば我々の身体は安全を確信し、ときたま生じる予測できない音は危険信号として察知するため、意識を覚醒させる。身体の安全という建築における基本的な要素は無意識領域では音が大きく絡んでいる。しかし、この事実は一般にあまり知られていない。ちょっとした予測できない音は無意識の領域で我々に死の恐怖を呼び覚ます。日常空間でそのような恐怖心が生じると、意識上ではそれが音以外の様々な原因を創造することが多い。家のきしみは昼と夜の温度差による木の膨張・圧縮によって生じるが、それを理解していないヒトは死の世界、すなわち霊現象と簡単に結びつけてしまう。

恐怖 無意味の 無意識下で常に働いている聴覚が通常とは異なる種類の音を感知すると、意識を覚醒し、その音が何を意味するのかという思考が意識上で優先的に働いてしまう。意味化が可能となり、自分の身体をとりまく空間に危険がな

いことを判断することができれば、その音は無意識領域に押し下げて良いということになる。その音が再び現れてもそれは我々の意識を覚醒することはない。また、自分をとりまく空間に少しでも危険があるという判断がなされた場合には、その音の源となる物体に対して怒りの感情が生じる。そしてその音を制御可能であれば怒りは収まり、制御できない場合には怒りは収まらず、その音源を所有する他者に対する怒りが蓄積することになる。さらに音の意味化が不可能であるとき、不安と恐怖の感情がわき起こる。不安と恐怖という不快をおさめるために、どうかして意味化しようという思考が働く。家のきしむ音が昼と夜の温度差による木の膨張・圧縮によるという意味化がなされれば、その思考は無駄ではない。しかし、通常ヒトは恐怖が働く状態ではその原因を死の世界と結びつけたがる。つまり、死んだおばあちゃんが来たのだとか、ポルターガイストのしわざだとかいうことになる。そして、その不安を自分で解消することができなければ、他者（例えば占い師や霊能者）に意味化をゆだねる必要が生じる。

無音の恐怖 ヒトは静寂を望むが、それは物理的な音の小ささを望んでいるわけではない。無響室の中のような人工的な無音の環境にヒトをおけば、たちまち不安が訪れるが、それは空間を把握できないという不安である。ヒトは生まれる前の胎内にいるころから音を聴いていると言われていたが、その頃から含めても無音の環境に置かれた経験がない。無音という未経験の空間におかれたときに生じる不安から気づくことは、日常的な空間で聴覚は常に安心を届けているということ、さらに言えば自分をとりまく空間の状況を無意識的に把握しようとしていることである。室内空間を身体のアプシオンとすることを可能とする聴覚的な技能は胎内から出た直後から学習され、数々の室内または屋外の空間における聴覚的な体験を経て、その技能を獲得する。無響室に入ったときに生じる不安あるいは恐怖は、無音という未体験の空間を身体化する技能が機能しないことにより生じるものである。

静寂 したがって、我々が望む静寂、静けさとは、無音ではなく、身体化可能な空間として音が存在する環境を意味している。逆にうるささは必ずしも音が大きいことを意味するものではなく、聴覚によって身体化した空間、すなわち音響空間という身体の一部を乱す音の存在を意味している。物理的な音のエネルギーがいかに小さくても、その音が原因となって身体化された空間が乱されたり、あるいは自分の身体として制御することができなくなる場合には、怒りの感情が生じ、それがうるさいという評価につながるのである。

(Tacit knowing)
暗黙知

日本語で知は一般に knowledge を意味するが、我々がここで用いる知はマイケル・ポランニーが述べるとおり knowing である。ここで知を knowledge ではなく knowing であると定義することの意味は深い。例えば我々は走っているときに何をしているのですかと聞かれれば、「走っているのです (I'm running)」と答えるが、室内空間にいて無意識的に聴覚が空間を把握しようとしているときに、「空間を把握しようとしているのです (I'm knowing a space around me)」などと答えない。自転車に乗っているときも、金槌で釘を打っているときも同様である。通常、能動的な行為は意識上で行われているため、何をしているかをはっきりと答えることができるが、マイケル・ポランニーの指摘は暗黙的 (tacit) な領域 (無意識に近い状態) でも能動的な行為が存在するということである。ヒトは聴覚を用いて暗黙的な領域で能動的に空間を把握しようとしている。ヒトを無音の状態におけばそれに気づくことは前に示したとおりである。「暗黙知の次元」とは意識にはのぼらず、しかし完全に無意識な状態ではない脳の活動において、能動的に知る (knowing) という行為が働いており、しかもそれがヒトの知を形成するための本質的な機能として重要であるということだ。しかし、それは意識上に現れないため、「I'm knowing」という表現はできない。マイケル・ポランニーが1969年に著した「Knowing and Being」は「知と存在」と訳されているが、これらの [ing] にはそのような深い意味が込められている。つまり、「知ること」や「居ること」は、ヒトの受動的な所作ではなく、能動的な行為なのである。

むすび

以上、聴覚によって空間を身体化する技能の存在を暗黙知理論に基づいて記述してみた。ここで述べたのは身体と物理的な空間に関する暗黙知の働きであるが、暗黙知の働きはそれだけではない。つまり、言語活動においても暗黙知は働いており、それは身体的で物理的な空間における活動とは異なる。私は身体的な部分で働く暗黙知の空間を実空間、言語的な部分で働く部分を意味空間と呼んでいる。したがって上述は一人のヒトと実空間との関係に関する議論だが、複数のヒトを含む場合には意味空間における暗黙知の働きについて議論する必要が生じる。一人のヒトと空間との関係において音は死や恐怖との関連が深いと述べたが、複数のヒトを含む空間に関する議論では「祭り」の空間が中心となり、音は生や喜びとの関連が深いことを述べることになる。